

「相棒だから。……それだけ？」

——まだ二人が、互いの好意を言葉にするより前。ヨルファミリア本部——休日の昼。大食堂の一角にあるソファ。そこには、あめちゃんとにゃんこがいた。正確には——

「にゃんこ～、動けな～い」

「動かなくていいよ」

「えへへ。じゃあ動かなーい」

あめちゃんが、にゃんこの膝を枕にして完全に寝転がっていた。にゃんこは片手でスマホを眺めながら、もう片方の手であめちゃんの髪を撫でている。さら、さら。

「ん～……」

あめちゃんが気持ちよさそうに目を細める。

「そこ好き」



「ここ？」

「もうちょっと上」

「注文多いなあ」

そう言いながらも、にゃんこの手は止まらない。

「……にゃんこの手、落ち着く」

「そう？」

「うん」

「じゃあずっと撫でてよっか」

「ほんと？」

「うん」

「やったあ」

あめちゃんが嬉しそうに笑う。その様子を——少し離れたテーブルから、ヨルとレモンが見ていた。

「……………」



「……………」

レモンが口を開く。

「ねえヨル」

「うん」

「あれって普通なの？」

「少なくとも私の知ってる『相棒』ではないね」

「だよな」

二人がもう一度見る。今度はあめちゃんが、にゃんこの手を両手で掴んでいた。

「にゃんこの手ちっちゃーい」

「そっちもでしょ」

「比べよ」

二人が手のひらを合わせる。ぴったり。

「あ、ほぼ一緒！」



「ほんとだ」

「……………」

「……………」

なぜかそのまま手を離さない。あめちゃんが指を少し動かす。
すると自然に——指と指が絡まった。恋人繋ぎ。

「……………」

「……………」

しかし二人とも何も言わない。そのまま。あまりにも自然。
レモンがヨルを見る。

「……普通なの？」

「二回聞くくらいおかしいと思ってるなら、もう答え出てる
じゃん」

しばらくして。



「にゃんこ」

「ん？」

「お腹すいた」

「何か食べる？」

「食べる」

「何がいい？」

「にゃんこが食べてるやつ」

「まだ何も食べてないけど」

「じゃあ同じのにする」

「はいはい」

二人でキッチンへ冷蔵庫からプリンを二つ取り出す。ところが――

「あ」

にゃんこが気づいた。



「スプーン一個しかない」

「別にいいじゃん」

「え？」

「一緒に使えば」

「……まあ、いっか」

あっさり了承。にゃんこがプリンを一口。

「あ、美味しい」

「私も！」

「はい」

そのまま同じスプーンであめちゃんに食べさせる。

「ん！」

あめちゃんの顔が明るくなる。

「おいしい！」



「でしょ？」

「もう一口！」

「あーん」

「あーん♪」

そこへ偶然トムカスが入ってきた。

「水——」

止まる。二人を見る。

「……………」

無言で冷蔵庫から水を取る。そして出ていく。数秒後、廊下から声。

「レモン」

「なに？」

「あの二人、付き合ってるのか？」

「私に聞かないでよ！」



夕方。あめちゃんとにゃんこは本部の中庭回廊にいた。夕焼けを眺めながら、二人並んで座っている。今度はにゃんこが、あめちゃんの肩にもたれていた。

「ねえ、あめちゃん」

「ん？」

「今日みんなに変な目で見られてた気がする」

「そう？」

「うん」

「なんでだろ」

「さあ」

沈黙。風が吹く。にゃんこの髪が揺れる。あめちゃんがその髪をそっと直してあげる。

「ありがと」



「んー」

また沈黙。しばらくして、にゃんこが小さく呟いた。

「……あめちゃん」

「なあに？」

「私たちって、距離近い？」

あめちゃんが首を傾げる。

「近いんじゃない？」

「やっぱり？」

「でも相棒だもん」

「……相棒なら普通？」

「普通普通」

「そっか」

にゃんこは納得したように、さらにあめちゃんへ身体を寄せる。



「じゃあいいや」

「うん」

そして——あめちゃんは何気なく、にゃんこの頭に頬を寄せた。ぴとっ。

「……………」

にゃんこが固まる。

「にゃんこ？」

「……なに？」

「顔赤いよ？」

「夕焼け」

「そっかあ」

「そう」

明らかに違う。あめちゃんは気づいていない。……ように見えた。ところが——



「ねえ、にゃんこ」

「ん？」

「私がほかの誰かにもこうやってくっついてたら、どうする？」

「……………」

にゃんこが黙る。

「嫌」

即答だった。

「なんで？」

「……………」

「なんでなんで？」

「知らない」

「え〜？」

「知らないってば」



にゃんこが少し拗ねたように顔を逸らす。すると、あめちゃんが嬉しそうに笑った。

「じゃあ、にゃんこだけにする」

「……え？」

「こうやってくっつくの」

「……………」

「にゃんこだけ」

今度こそ、にゃんこの顔が真っ赤になる。

「……ばか」

「なんで!？」

「知らない!」

「またそれ〜!」

笑いながら、あめちゃんがにゃんこの腕に抱きつく。

「離して」



「やだ♪」

「暑い」

「夕方だから涼しいよ？」

「そういう意味じゃない！」

「じゃあどういう意味？」

「もう知らない！」

口ではそう言いながら、にゃんこは——あめちゃんの手を握った。ぎゅっ。

「……………」

あめちゃんが手元を見る。今度はにゃんこから。指を絡めている。

「にゃんこ」

「なに」

「これも相棒だから？」



「……………」

長い沈黙。

「……たぶん」

「そっかあ」

あめちゃんは笑った。そして、ぎゅっ。握り返す。

「じゃあ、ずっと相棒でいよ」

「……うん」

二人の肩が触れる。手は繋がったまま。本人たちはまだ——
これを「相棒だから」と呼んでいる。でもヨルファミリアの
メンバーで、その言葉を信じている者は——

もはや本人たち以外、一人もいなかった。

その日の夜。ヨルファミリア内では密かに、

『あめにゃん、いつ自覚するのか問題』



について話し合いが行われたという。なお本人たちはその頃——一つの毛布に二人でくるまりながら、仲良く映画を観ていた。やっぱり距離感は、完全に壊れていた。

